

朝から立て続けに患者宅を訪問し、事務所に戻って来たときには日が傾いていた。ポロい一軒家の玄関引き戸にガチャガチャと鍵を差し込んで解錠し、手前側の戸を少し浮かせ気味にスライドさせ、人ひとり通れるだけの幅を何とか確保して宇野珠子は中に入った。病院から訪問看護に転職して五年になるが、この立てつけの悪い玄関だけは、いつまで経っても慣れることができない。

訪問看護は外に出る仕事だから事務所なんか金がかかる必要はない、というのが、十年前にこの訪問看護ステーションを立ち上げた尾藤いづみの口癖だった。彼女は、珠子の病院勤務時代からの上司で、五十を過ぎた今も訪問看護の最前線で走り回っている。そのバイタリティは尊敬に値するが、玄関を出入りするたびにスタッフのストレスが蓄積し、それゆえにパフォーマンスが損なわれている現状を、経営者としてどう考えているのか。聞けるものなら一度聞いてみたい、というのがスタッフ全員の思いである。そこへいくと総合病院の設備はさすがだったな、と珠子は前職を思い返す。

高さのある上がり框をまたいで八畳の和室に入る。両側の壁ぎわに事務机が三つずつ。看護師五名、事務員一名の小さな所帯である。

誰もいないが、部屋の電気は点いていた。日が暮れてから戻ってくるスタッフのため、電気を点けっぱなしにしておくのが尾藤の流儀である。たしかに「お疲れさま」と言われているようで嬉しいと、スタッフ間でも好評だった。

暖房のスイッチは切られているが、直前まで誰かが仕事をしていたのだろう、部屋の空気はまだ十分に暖かい。肩から荷物を下ろし、上着を脱いでハンガーラックにかけ、自分の机に向かう一連の動作の中に、尾藤の机の上を確認することも含まれている。書類が山積みになっている中に、時おり自分に関わりのあるものが無造作に置かれていたりするからだ。もう数年前になるが、退職者が出る情報を先んじて知り、息子の延長保育を早めに手配することができた。以来、癖になっている。考える前に体が動くタイプの尾藤は、昔から書類整理が大の苦手だった。早いもので、尾藤と知り合ってから十五年になる。

新人看護師として総合病院の入院病棟に配属された珠子の指導係が尾藤だった。五年前、珠子が三十一歳のとき、すでに病院を退職して訪問看護ステーションを立ち上げていた尾藤から、一緒にやらないかと声をかけられたときの嬉しさを、珠子は今も覚えている。看護師はどこでも引く手あまたで、よりよい待遇や働きやすい環境を求めて転職を繰り返す同期や先輩後輩を大勢みてきた。できればここでずっと働きたい。そう思え

る職場に、一回目の転職で出会えたのは幸運だとつくづく思う。

昼に食べ損ねた弁当の包みを解こうとして電話が鳴った。出てみると相談員の渡辺である。行政から委託され、この地域に暮らす障害者や高齢者の困りごとの相談にのり、制度やサービスにつなぐ役割を担っているという。珠子が担当する在宅患者の多くにも関わっているが、尾藤に対して臆せずものを言う渡辺を、珠子は尾藤と同等に格付けしている。

尾藤は不在だと伝えると、少し間があった。

「宇野さんに聞いていいのか分からないんですが」

そう言われると「なんででしょう」と応じざるを得ない。すでに相手のペースである。たしか彼女の方が年下のはずだが、全然そんな感じがしない。

「ちよつと言いくいんですけど」

ちつとも言いくそうでない口調だったが、ふだん歯に衣着せぬ物言いをする渡辺にしては回りにくい。何を言い出すのか。珠子は椅子の上で姿勢を正した。

「辰巳^{たつみ}先生って、どう思います？」

「はい？」 想定外の質問に、声が裏返った。

「私のところに苦情が来ていて。辰巳先生が担当している当事者……あ、患者さんたちから」

当事者という言葉は渡辺はよく使う。使っておいて、話す相手の属性に合わせて必ず言い直すのが鼻につく。

「あの先生はダメっていう声がちらほら。話を聞かないし、何もしないから、家に来てもらう意味がないって」

辰巳は近くの国道沿いでクリニックを経営している。辰巳ひとりで外来診療をこなしながら、訪問診療にも力を入れており、土日も含めて二十四時間の緊急連絡にも対応している。いつ休んでいるのか心配になるほどだ。

「それはないでしょう」

声に力がこもった。辰巳ほど物腰が柔らかく、誰に対しても腰の低い医者——しかも経験豊富なベテランの——を他に知らない。全く、何を言い出すのやら。

「話を聞くふりをしているだけ、ですって」

「そんな失礼なこと」

「私が言ってるんじゃないですよ。当事者のみんなの意見」

「……」

みんなって誰だよ小学生か、という心の声が向こうにも伝わったらしく、「^{うるしは}漆原さん

も言っちゃいましたよ。あいつはあかんって」と、渡辺は珠子の受け持ち患者の名を挙げた。

漆原は訪問看護を週三日利用している胃がん患者だ。ヘビースモーカーでタバコを片時も手放せず、たとえ入院してもすぐに退院してくるので、尾藤も辰巳も「責任が持て

ない」と呆れている。

「宇野さんにも伝えているのにつて漆原さん、こないだボヤいてましたよ」

「伝えてるつて、何を？」

「だから、辰巳先生への不満ですよ。宇野さんが来るたびに訴えてるけど、ちゃんと上に報告してくれているのかつて。先週、私が訪問したとき、ずいぶん詰められました。私に言われても、ねえ」

いきなり自分に矛先が向いて返答に窮すると、渡辺の口調が一転した。

「苦情として、きちんと対応しろつてことですよ」

「苦情……」

そんな深刻な内容を、訪問するたびに漆原から聞いた覚えはなかった。

「私には、いつも先生がハイハイつてうなずきながら聞いてくれるつて言つておられましたが……」

「そう言われて、宇野さんはどう思いました？」

「どうつて、その、先生が漆原さんの話を丁寧に聞いてくださつているんだな、と」

電話の向こうで、ため息をつかれた。

「漆原さんはね、先生に話をして、いつもてきとうに聞き流されて終わるから、状況がいつこうに改善しないつて悩んでるんですよ」

「だったら、漆原さんから辰巳先生に直接そう言えればいいじゃないですか」

「そんな気にならないんですつて。まともに受け取つてもらえないつて分かつているから」

「はあ」

だからといって、医者への不満を看護師に言われても困る。

こちらの反応が鈍いせいとか、渡辺のギアが上がった。

「あの先生、人の話を全然聞きませんよ。看護師さんに任せきりだし、ちよつと批判されただけで、すぐキレるし。ひとつもいいことないですよ」

「そんなこと……」

「先日、尾藤さんにもお伝えしたんですが、辰巳先生に不満を抱く人なんているわけないつて笑い飛ばされました。漆原さんの人間性に問題がある、ですつて。こういうとき尾藤さんはダメですね。看護師として切れ者だとは思つけど、ことドクターの話となると……判断基準が狂うつていうか」

下手に反論したら十倍になつて返つてきそうなので、とりあえず黙つていることにした。

「尾藤さんにとつて、自分の意のままに動くドクターが“いいドクター”なんですよ。そのドクターの力量とかは関係なく」

辰巳が尾藤の意のままに動く？ そんなことはありえない、と胸のうちで反論する。

辰巳はベテランの医師だ。尾藤だってベテランの看護師だが、尾藤は常に辰巳を尊重し、辰巳の指示に従って動く。その関係が崩れてしまったら治療が成り立たない。

電話が終わってから、もやもやした気分を引きずっていた。

かかりつけ医のいない新規の依頼がきた場合、尾藤は必ず辰巳のクリニックにつなぐ。辰巳にしても、患者を途切れることなく紹介してもらえというメリットがある。囲い込みと言われればそれまでだが、医師と看護師が常駐する病院とは違い、それぞれの職種が別々に患者に接する訪問診療では、とりわけチームワークが重要となる。互いを熟知し、あうんの呼吸で連携できる医師と訪問看護がタッグを組むのは、ごく自然なことなのだ。

空腹を感じたが食欲はなく、珠子は手つかずの弁当に蓋をした。

翌日、珠子は漆原を訪問した。患者本人の代わりに薬局で受け取った四週間分の内服薬を、壁にかけられた「おくすりカレンダー」に一日四回×七分に分けてセットしていく。服用量が多く、カレンダーに取り付けられた二十八個の小さな透明のポケットに、一回分の薬が収まるように入れていくにはコツがいる。最上段の月曜から最下段の日曜まで、縦の列にまずは朝食後の薬を手早くポケットに入れていく。同じ要領で昼食後、夕食後の薬をセットしている最中、ベッドの端に腰かけてスマホを触っていた漆原が話しかけてきた。

「医者のこと、渡辺さんから聞いたる？」

漆原は辰巳のことを先生とは言わない。珠子は透明の長い帯のようになって眠る眠る薬の束を、一回分ずつミシン目に沿って切り離しながら漆原の顔を見た。

「腹痛がおさまらんのや」
はらいた

いつになく弱々しい声に、珠子は作業の手を止めた。

「お薬はのみました？」

日頃から下痢と便秘を繰り返している漆原には、整腸剤が処方されている。

「のんだけど、あかん」

「辰巳先生に連絡しましょうか。ちょうど今の時間、この近くを回っているはずだから」

「あいつに言うてもあかん」

「さっき、先生の話をしかけたじゃないですか」

「あいつの悪口言うたら、ちよつとは痛みがおさまるかと思ってるな」

「なんですか、それ」

あきれて返すと、漆原は口の端を歪ませた。どうやら笑おうとしたらしい。これは深刻な事態かもしれない。「やっぱ先生に連絡します」と立ち上がりかけたそのとき、制服のポケットの中で携帯電話が振動した。

「宇野さん？」

まさに辰巳だった。緊急の用ではなく、いま訪問中の患者の、次の受診予約日を確認したいとのことだった。患者の家族が病院から渡された予約票を紛失してしまったらしい。電話を終えようとしたとき、背後で漆原のうめき声があった。

「宇野さん、今の声」とたんに辰巳の声が険しくなる。「誰のところにいるの？」

漆原の様子を伝えると、やはりこのあと、こちらに来ると言う。後ろで聞いていた漆原が「来ていらんで」と声を張り上げた。「医者に来ても意味ないから」

珠子は内心ひやひやした。医者には直接言いにくいから、渡辺や珠子に文句を言っていたのではなかったのか。

「先生、すみません、あの」

なぜか珠子が謝ってしまふ。すると余裕を感じさせる笑い声が聞こえた。

「しょうがないね、漆原さんも。医者が行くのに意味がないなら、誰が行っても意味がないだろうに。でもまあ主治医としては放っておけないし、このあとちよつと寄らせてもらうよ。玄関の鍵だけ開けておくよう彼に言っといて」

「分かりました」深く一礼して電話を切る。

振り返って「勘弁してくださいよ、もう」と軽く睨みつけると、漆原は漆原で大きなため息をついたところだった。

「漆原さん、大変だったね」

訪問の合間に事務所に戻ってパソコン作業をしていると、外から戻ってきた内山が隣の机から話しかけてきた。二月だというのにTシャツに薄手のパーカーという軽装である。体格が立派すぎて制服のサイズが合わない彼は私服の着用が許されており、いつもアニメのキャラクターがでかかどプリントされたTシャツを着ている。一見してオタクっぽい風貌であるが、これで四児の父親と聞けば、子煩悩な良き父親に見えてくるから不思議だ。三番目の娘が珠子の息子と同年で、今日のTシャツはその娘のお気に入り。キャラクターらしい。そのキャラクターの魅力やアニメのストーリーを内山は熱心に語ってくるのだが、娘のいない珠子は何度聞いても覚えられない。

漆原の訪問は、珠子と内山が交替で担当している。今朝は内山が訪問する番だった。昨日腹痛をおこして辰巳が駆けつけてからの経過は、辰巳がクラウドにアップした記録で珠子もすでに確認している。

「なんだかんだ言っつて、先生に来てもらったら安心するんですね」

本人の話を傾聴したら落ち着いた、と辰巳の記録にある。医師に向けられた漆原の発言については触れられておらず、ただひと言、看護師に暴言を吐いた、とだけあった。なぜ正確に書かないのだろうと珠子は首を傾げた。この書き方だと、内山のように、「大変だった」のは珠子だと誤解してしまう。「ちよつと批判されただけで、すぐキレル」と渡辺は言っていたが、こういうことだろうか。

入力作業に戻ろうとしたら、内山が声をひそめて言った。

「今朝、漆原さんのところに行ったら、ベッドから起き上がれなくなってるさ」

「ええ？」

驚いて内山の方に向き直ると、静かに、と目で訴えてくる。部屋を出てすぐのトイレの前で、尾藤が事務員と何やら話し込んでいるのが見えた。この距離だと会話は聞こえない。でも、今の会話は別に聞かれてまずい内容でもないだろうに。

内山は背丈も横幅もある暑苦しい見た目に似合わず「できる」看護師で、そのうえ気さくで話しやすい。尾藤に次ぐポジションにいる彼にしか分からない気苦労があるのかもしれない。

漆原の記録にアクセスする。今朝の訪問記録がすでにアップされていた。さすが内山だ。仕事はやすい。医師の指示を仰いで頓服を服用した、とある。

「昨日は辰巳先生が訪問して、いったんおさまったけれど、今朝になって痛みがぶり返したということでしょうか」

「いや、昨日からずっと痛みが続いていたらしい」

「じゃあ昨日、先生が訪問して落ち着いたって言うのは？」

「〃こいつに何を言うてもムダやから。ひと言もしやべらんかったら、一人で勝手に納得して帰っていきよった」だって」

「関西弁、上手ですね」

「ありがとうございます。いちおう尾藤さんにも報告しておいたから。もちろん先生への文句は省いたうえで。何か聞かれたら宇野さん、対応よろしくね」

そう言うなり、内山は次の訪問先に慌ただしく出かけていった。

昼すぎ、漆原が救急搬送されたという連絡が入り、珠子の夕方の訪問がキャンセルになった。

息子の授業参観にひよつとして間に合うかと思ったがダメだった。二年一組の教室の前まで来たときに終了のチャイムが鳴った。教室の後ろの扉をそつと開けて中に入ると、担任の若い女性教師が黒板を背にして終わりの挨拶をしている最中だった。子どもたちがいつせいに立ち上がる。教室の後ろに立っている大人たちが外に出ようとすする流れに逆らって見渡すと、いた。窓際の前から二番目の席で、水色のランドセルに腕を通している後ろ姿を見て、ふいに涙が出そうになる。声をかける前に息子がこちらを振り返って一瞬、目を見張り、みるみる嬉しそうな顔になる。担任の先生と会釈を交わして息子の席に近づいていく。

「ずっといたの？ 気づかなかったー」

息子が無念そうに体をよじるのと一緒にランドセルも揺れた。

「いやあ……その」

いま来たばかりとは言いづらくて言葉を濁すと、息子がその場で飛び跳ねるように体を揺らし、「どうだった？ どうだった？」と聞いてきた。

息子が先生に当てられて答えた場面の感想を求められ、ついに白状すると、「だって仕方ないねえ」と、息子がかえってすっきりした顔でうなずいた。

「でも、直也が先生の質問に答えているところ、見られなくて残念だった……」

「なかなか立派な答えだったと思うよ」

黒板の前でこちらを見ながら笑いをかみ殺している担任教師と目が合い、ふいに満たされた感情が体の底から湧き上がった。三十年近くも前、自分の母親が美容院の仕事の合間を縫って授業参観に駆けつけてくれた記憶が一瞬にして蘇る。遅れてでも来て良かった。漆原には悪いが、訪問が飛んでありがたかった。

息子がきらきらした目で珠子を見上げてくる。

「このあと、どうするの？ どっか行く？」

「直也が行きたいところに行こう。あんまり時間ないけど」

「また仕事？」

「うん、このあと、もう一件だけ」

「じゃあ、スーパーに行きたい」

「かしこまりました」

近くのスーパーマーケットで買い物を買って帰宅すると、玄関の鍵が開いていた。リビングのテーブルでパソコン作業をしている夫の姿を見たとき、「ちよっと！」と珠子は叫んでいた。

「あ、おかえり」夫がのんびり顔をあげる。

「おかえりじゃないわよ。なんで家にいるわけ？ 今日会社に行くって、今朝、言っていたじゃない。あ、外から帰ったらまず手を洗って」と、息子を洗面所に向かわせる。

「急にリモート会議に変更になって、出勤しなくて良くなったんだよ。寒いし、ラッキ

ー

マグカップを両手で包み込むように持ち、夫は音を立てて飲み物をすすった。

「それ、私のマグカップ！ 勝手に使わないでって、いつも言ってるでしょ」

「そうだよ、ママがフンパツして買った大事なコップなのにさ」

手を洗ってリビングに戻ってきた息子が加勢する。

「おう、奮発だなんて難しい言葉、よく知ってるな。さすが俺の息子。いや、ママの息子か」

「家にいるなら、なんで直也の授業参観に行つてあげないのよ」

もし夫が授業の開始時間から参加してくれていたなら、息子がどれほど喜んだか。そう思うと残念だし悔しかった。

「いや、だってリモート会議があるしさ。家にいたって仕事はあるよ？」

「会議は何時から何時まで？」

「え？」

「だからその、なんだっけ、リモート会議？ 何時から何時までだったの？」

「午前中には終わったかな」

「だったら授業参観に行けたじゃないの」

「いや、だから午後も仕事があるんだって。リモートだからってサボったりできないよ？ パソコン前から離席して戻ってこなかったら、チェック入るしさ」

もつともない分である。引くに引けず無言で突っ立っていると、息子が珠子のコートの裾を引っぱり、「ママが来てくれたから、ぼくはそれでいいよ」と助け船を出してくれる。息子には手洗いを促しておきながら、自分はまだコートも脱いでいなかった。買ってきた食材を冷蔵庫に入れ、今すぐ使うものを取り出し、夕食の下ごしらえを始める。鍋の中にカットした肉と野菜を投入し、グリルに味つけた魚の切り身を並べ、あとは火にかけるだけの状態にしておく。それぞれの加熱時間と火加減を夫に指示する。夫が自らできるのは、冷凍ごはんをレンジで温めることぐらいだ。

「もし味が薄かったら、直也のとは別にして、小分けにしてから味つけてね」

「分かっています、分かっています」

晩酌を欠かさない夫は、塩辛い味つけを好む。何度注意しても減塩する気はないらしく、近頃はもう諦めている。

先ほど言いすぎたことを謝る代わりに、「じゃ、あとはよろしくね」と、いつもは言わないひとことを付け加えると、夫がパソコン画面から目を離さずに片手を軽くあげた。

本格的な花粉シーズンを迎え、内山はますます暑苦しくなった。ひどい鼻炎で口呼吸のたびにマスクが膨らんだりへこんだりし、気の毒だとは思いますが、見ているこちらが落ち着かない。

「内山さん、それ何とかならない？」

「耐えかねた尾藤が声をあげる。」

「ずみません」

息も絶え絶えに答える内山は痛々しいというか、はっきり言ってイタイ。

「そんな調子で訪問したら、患者さんやご家族が不安になるでしょ。自己管理がなくなない！」

「ずみば ■ ※ △ # ◎」

内山はティッシュペーパーを何枚も引き抜いて盛大に鼻をかんだ。

仕事は多忙でもヒマでもなく、といったところだ。新規の依頼も来ることは来るが、入院や死亡で契約終了となるケースも多く、担当件数は減少している。界限で新しい訪問看護ステーションが次々とオープンしているのも要因のひとつだ。年度末の決算期を

迎えて、尾藤はピリピリしていた。

住宅型有料老人ホームやサービスパ付き高齢者住宅のように、一か所で複数の患者を獲得できれば効率よく件数を稼げる。そこまできなくても、患者一人で訪問回数を稼ぐケースも重宝される。

ただし、漆原のように「困った患者」の場合は別だ。先日の退院後、訪問看護を週七日に増やしたが、いつのまにか元の週三日に戻った。「本人が嫌がるから」と尾藤は言うが、あとで内山が「嫌がつているはどっちだか」と、めずらしく愚痴をこぼしていたのが印象的だった。

一年前に住宅型有料老人ホームを出て一人暮らしを始めた目加田哲司は、尾藤が訪問看護ステーションを開設して最初に契約した患者「第一号」である。ホーム入居中の九年間は尾藤が訪問看護を担当し、一人暮らしに移行したタイミングで珠子が主担当を引き継いだ。「宇野さんなら安心してあとを任せられるから」という殺し文句を、珠子は今も心の糧かてにしている。尾藤は部下をやる気にさせるのが本當にうまい。

目加田は現在、五十五歳。小児脳性まひによる四肢の機能障害があり、立つことはできるが歩行は難しく、室内の移動は車いすを使用している。

入居中はホームが提携する在宅診療クリニックが主治医だったが、目加田が一人暮らしを考え始めた段階で、尾藤はまず、辰巳が訪問可能なエリア内で物件を探してくれるよう渡辺に依頼した。そんなことまで相談員がやってくれるのかと珠子は驚いたのだが、一か月もしないうちに、渡辺は目加田も尾藤も気に入る物件を見つけてきた。

さっそく尾藤と珠子とで物件の下見をした。家賃は生活保護の枠内におさめる必要があるため、六畳一間のワンルームは仕方がないとして、マンションの出入り口や、部屋の玄関の段差は低く、介助すれば車いすで難なく越えることができた。目加田は「尾藤さんたちが気に入ったのなら、それを信じる」と言い、自身は物件を見に行かずに契約しようとした。それに待ったをかけたのが渡辺だった。「自分が住む家なんだから、絶対に自分の目で確かめた方がいい」と、目加田と尾藤を説得した。

ホームに外出許可をもらい、渡辺が介護タクシーを手配し、尾藤と珠子が目加田の物件見学に付き添った。その日は、大家さんが自ら部屋を案内してくれた。浴室とトイレが狭くて段差もあるのが気になっていて、本人が来るならぜひ会っておきたかったのだと話す大家さんに、入浴は通所サービスパを利用、排泄は膀胱カテーテル留置とオムツ交換のため、家のトイレは使わないことを説明した。訪問看護が毎日入る予定だと伝えると、大家さんはすぐく安心したようだった。入居に際して保証人不要、敷金礼金ゼロ、そのうえ辰巳のクリニックからほど近い立地だった。

「よくこんな条件の揃った物件が見つかりましたね」

目加田の一人暮らしも落ち着いた頃、営業活動で渡辺の事務所を訪ねた折り、患者募

集のチラシを両手で渡しながら思いきって聞いてみた。

「地域のネットワークがあるんですよ」

受け取ったチラシを裏返して、『今月の訪問看護の空き状況』を眺めながら、渡辺は事もなげに言った。

「民生委員とか、大家さんとか、コミュニティソーシャルワーカーとか。目加田さんの場合はすぐ見つかったので利用しませんでしたけど、物件が見つかりにくい高齢者や障害者の住まい探しを支援する仕組みもありますし」

「へえ」

何だかよく分からないが、さすがという感じである。実際、この物件さがし以来、尾藤のなかで渡辺の株が爆上がりしたのだ。

「うちの尾藤もすごく喜んでいました。やっぱり渡辺さんは頼りになるって」

てつきり喜ぶかと思ったら、渡辺は顔をしかめた。

「別に尾藤さんのためじゃなくて、目加田さんのために動いただけです」

それはそうだ。余計なことを言ったと思いつながら神妙な顔でうなずく。

「まあ、でも、目加田さんのためイコール尾藤さんのため、ということかもしれませんね」と、渡辺は表情を緩めた。

「目加田さんにとって、一人暮らしになっても尾藤さんが引き続き担当してくれることが一番の希望だったわけですし。あの二人の絆って、すごいですよ」

「担当して十年になるそうです」

「それにしあって、あそこまでの信頼関係を築くのはすごい。やっぱり毎週毎週、顔を合わせるのって大事ですよ。私なんて会うのはせいぜい月に一、二回だし。訪問看護やヘルパーさんには適わなくなって、いつも思います」

「役割が違うだけです。渡辺さんには渡辺さんにしかできないことがあるでしょうし」

「うん。分かっているんですけどね」

いつになく渡辺がしんみりつぶやいた。

目加田哲司が急変したのは大型連休の初日だった。呼吸困難を起こしたらしい。

午後七時すぎ、尾藤から電話でそう知らされたとき、珠子は自宅で息子と二人、晩ごはんの最中だった。その三時間前、午後四時に珠子が訪問したときは、いつもと変わりなかった。呼吸器系の持病はなかったはずだ。今、主治医の辰巳がそばについているという。

「先生が駆けつけてくださったんですね。だったら安心——」

言い終わらないうちに尾藤の声がかぶさる。

「本人がインフルエンザとコロナの検査を希望したから往診しただけ。そうしたら急に呼吸困難を起こして、どうしたらいいのか僕は分からないって言うのよ」

「はい？」

「だから看護師にすぐ来てほしい。尾藤さんが無理なら他の人でもかまわない。今、救急車を呼んで、心臓マッサージをしながら待っている状況だって。先生からは以上」

尾藤は一気に話した。

状況がのみ込めない。

辰巳は心臓マッサージをしている最中に、尾藤に電話をかけたのだろうか。

「今すぐ向かってても、十五分はかかります。救急車の方が早いと思いますよ」

「私も先生にそう言ったんだけどね。今、この状況で看護師が行っても、することないですよって」

でもね、と尾藤は早口で続けた。

「先生がどうしても来てほしいって言うのよ。悪いけど、ひとつ走りしてくれない？ 私はまだ会場なの。とりあえず今から戻るけど、電車で二時間はかかるし」

この日、尾藤は外部の研修に講師として招かれていた。

小さい子がいるのにごめんね、と言われた瞬間、「いえ、大丈夫です」と反射的に答えていた。子ども優先で使えない部下だと思われたくない。訪問看護の仕事はフットワークの軽さが命だから、と尾藤はいつも言っている。

今日は出社してまだ帰宅しない夫にメッセージを入れ、息子には珠子か夫のどちらかが帰宅するまでインターホンが鳴っても応じないこと、マンション一階ロビーのオートロックを解除しないこと、知らない電話に出ないこと、台所や風呂場には危ないから入らないこと——ママ友やインターネットから子どもの事故のエピソードを仕入れるたび、注意事項は増えていく一方だった——を言いつて聞かせ、仕事用のカバンを引っかんで家を飛び出した。

目加田のマンションに着いたのが午後七時半。乗ってきた電動自転車のスタンドを立てるのもどかしく、マンション前に横づけされた救急車に駆け寄った。全開になった後部ドアから中をのぞくと、白衣の人物がストレッチャーに覆いかぶさるように中腰になっていた。辰巳だった。こちらに気づいた辰巳は、後は任せておけ、というふうにか強くうなずいた。目加田の顔は珠子からは見えなかった。

救急車のサイレンが遠ざかると、あたりは静まり返った。目加田を訪問中だった女性ヘルパーと二人きりになり、どちらからともなく「とりあえず中に入りましょうか」と声をかけ合い、目加田の部屋に向かう。

「宇野さんがいてくださって心強いです」

か細い声でヘルパーに話しかけられ、「こちらこそ」と返した。実際のところ、珠子ひとりでは主不在あるじの患者宅に上がることはできない。あとから物がなくなつた等と患者や家族に疑われた場合、身の潔白を証明してくれる第三者がいらないからだ。

今日の夕方に珠子が訪問したときにも、すでに介助で入っていたこのヘルパーとは、しよっちゆう顔を合わせているが名前が出てこない。急変時の状況について聞きたかったが、ヘルパーの憔悴ぶりが窺えたので断念した。辰巳が駆けつけるまでヘルパー一人に対応したのだから、さぞ心細かったに違いない。

まもなくしてヘルパーの上司がやってきた。ヘルパーステーション管理者の野村と名乗った。野村から先に帰って休むよう促されたヘルパーは、たちまち表情を引き締め、「ここまで来たら残ります。もし入院にならずに目加田さんが帰って来たら、介助が必要ですし」と言い切った。

三人でフローリングの床に座り、入院するか否かの連絡を待った。目加田の家には椅子がない。ベッドのそばに車いすがぼつんと置かれている。「ベッドにも車いすにも目加田さんがいないなんて、なんだか不思議な光景ですね」と、今まさに思っていたことを野村がつぶやき、自分の声だと錯覚しそうになる。

息子に何度か電話をした。そのたびに「ママ、こっちは大丈夫だから」と頼もしいことを言ってくれる。日頃、制限されているゲームを思う存分できるのが嬉しいようだ。「ぼくのことには心配しなくていいから、ゆつくり仕事して」と懇願する口調なのには笑ってしまった。夫からは、残業が長引いてまだ帰れないというラインが来ていた。

尾藤から電話がかかってきたのは午後九時前だった。

午後八時三十六分、死亡。

え、と言葉に詰まった。どうして、と言いかけた珠子を尾藤がさえぎった。

「もうすぐ、そっちに着くから。詳しいことはそのときに」

「今から来るんですか？ 目加田さんが帰って来ると思っ、私たち待っていただけなんですけど」

「すぐ行くから、そこで待っていて。ヘルパーさんも一緒に」

電話は一方的に切られた。

「亡くなったんですか」

野村が怒ったような顔で聞いてきた。「死因は？」

「それを今、尾藤に聞こうとしたんですけど、あとで説明するって」

野村は一瞬、黙り込んだのち、意を決したように顔を上げ、「宇野さん、これは言おうかどうか迷っていたんですけど」と切り出した。「まさか目加田さんが亡くなられるとは思わなかったのです」

横で呆然としているヘルパーにうなずいて見せ、野村は続けた。

「宇野さんは、尾藤さんからどういうふうに聞いておられますか？」

「どう、とは？」

「目加田さんの急変時の状況と、辰巳先生の対応について」

「え、と。呼吸困難に陥ったと聞きました。それで先生が心臓マッサージを」

「呼吸困難に陥った原因については？」

「原因？ それは…聞いていません。発熱して先生が往診したとき、急に目加田さんが呼吸苦を訴え始めたって」

尾藤との電話を思い出しながら慎重に答える。あの電話からまだ二時間しか経っていないということが信じられない。

「それは違います」

涙声のヘルパーが割り込んできた。

「目加田さんは窒息したんです。先生が来てから三十分後に」

「窒息？」

「しかも、その原因を作ったのは先生です」

「…：…どういことですか？」

「目加田さんはベッドで臥床中に急変したんです」

そう言ったきり、言葉に詰まってあとが続かない。

「足立さん、無理しなくていいから」

野村がヘルパーの背中をさすりながら、上着のポケットから折りたたまれた紙を取り出し、「足立から救急搬送までの状況を電話で聞いていたので、私が代わりに説明します」と言った。そうだ、足立さんだった、と珠子はその名前を、頭の片隅でバカていねいに幾度も反芻した。落ち着かなければ。ここが正念場だ。医療従事者としてどう振舞うのか、この人たちに試されている。脇の下を冷たい汗が伝った。

A4サイズの紙に走り書きされたメモを片手に、野村は説明し始めた。

「目加田さんは夕食後、ご友人にスマホで電話をかけました。オムツ交換のとき以外はベッドから離れて過ごされますから、そのときもこの車いすに座っておられました。足立は台所で食後の片付けをしていましたが、このとおりのワンルームですから、電話の内容は筒抜けでした。目加田さんは「朝から咳がある。インフルが流行ってるし、ひよっとしてコロナかもしれない」と不安そうに話し、その電話のあと、今度は辰巳先生に電話をして、できるだけ早く検査をしてほしいと依頼されました。すると辰巳先生が本当にすぐに来てくださって、目加田さんも感激していました。数分後、バンバンと大きな音がするので足立が台所から部屋をのぞくと、目加田さんはベッドで横向きに寝ていて、先生がベッドに上がって後ろに回り込んで背中を叩いていました。先生からは目加田さんの表情は見えませんが、足立からははつきり見えます。目加田さんの口から茶色の液体、夕食のデザートがチョコアイスだったのですが、それが流れ出ている、足立が「先生、嘔吐してます」と伝えると、先生は背中を叩くのを止めて目加田さんの顔をのぞき込みましたが、また背中をバンバンと叩き始めました。「吸引は？」と足立が声をかけましたが、先生は聞こえていないのかいないのか無反応でした。足立は医療的ケアの研修

を受けて吸引する資格も持っていますし、ある程度の知識はあります。そのうち目加田さんの表情がみるみるおかしくなり、「先生、息が止まっています」と大声で伝えましたが、先生は背中を叩くのを止めません。「救急車！」と叫ぶと先生はようやく顔を上げて「じゃあ君、呼んで」と言いました。足立が一一九番する間も、先生は背中を叩き続けていました。電話で救急隊員から心臓マッサージの指示があり、先生が目加田さんを仰向けにして心臓マッサージを始めました」

「吸引は？」

異物が喉に詰まっていたのであれば、いくら心臓マッサージをしたところで無駄なことだ。異物を取り除かなければ、肺に空気を送り込めない。

どうだったの、と野村に促された足立が、「吸引器は最後まで使われませんでした」と答えた。少し落ち着きを取り戻したようだった。

「ここにあるの？」

動揺しながらも、珠子はベッドサイドの吸引器を指差した。役所から無料で支給された真新しい吸引器。珠子が辰巳に診断書を依頼し、手続きを代行して手に入れたものだった。

足立は再び硬い表情になって下を向いた。

「途中で心臓マッサージを替わるよう先生に言われました。しかも二回。二回とも、ちよつと電話してくる、と言って外に出て行きました」

「ちよつと待って。その状況で医者を持ち場を離れたってこと？」

野村が驚いて声を上げた。足立の顔が大きく歪む。

「私、もう目加田さんの顔を見られなくて。先生、早く帰ってきて、と祈るような気持ちで心臓マッサージを続けました。もう怖くて……」

珠子は唾を飲み込んだ。口の中がカラカラに渴いていた。

辰巳は尾藤に電話したのだ。間違いない。どうすればいいのかわからず、普段から頼りきっているベテラン看護師に助けを求めたのだ。患者が危篤状態に陥っている現場にヘルパーを一人置き去りにして。

「そもそも、どうして背中を叩いたのかな」

沈黙を破ったのは野村だった。

「分かりません。直前まで車いすに座って、先生とも普通に会話していたのに」
足立が首を左右に振った。

「会話って、どんな？」

「咳が出てしんどいとか、熱はなさそうだとか」

「そういえば、インフルエンザとPCRの検査はしたのかな」

「さあ……それは分かりません」

二人のやりとりを遠くに聞きながら、珠子はスマホを触っていた。尾藤から「もうす

ぐ着く」というラインがしつこいほど来ていた。

ようやく尾藤が到着したのは午後十時すぎだった。

「ごめん、ごめん。辰巳先生がこっちに戻ってくるんだって。それまで宇野さんとヘルパーさんに部屋で待っていてほしいって言うからさ」

言い終えるか終えないうちに玄関ドアの開閉音が響く。尾藤が跳ねるように立ち上がり、「先生、お疲れさまです」と小走りに迎えに出る。「急変時に先生がそばにいてくださって、救急車にも同乗していただいて、本当にありがとうございます」「いやいや、僕は何も。僕が訪問してすぐに急変したから、救急車を呼ぶぐらいしか、できることはなかったけど」

そう話しながら辰巳が部屋の入り口に姿を現したとき、珠子は辛うじて頭を下げたが、ヘルパー二人は微動だにしなかった。

死因は誤嚥性肺炎だった、と辰巳は説明し、「死亡診断書にもそう書いておきましたので」と、その場にいる全員の顔を一人ずつ順に見ながら言った。

「死亡診断書も先生が書いてくださったんですか。搬送先の救命救急センターが書かずに？ 何から何までありがとうございます。お疲れさまでした」

野村と足立が無言で部屋を出て行った。後に続こうとした珠子を押しつけるように辰巳が前に出た。マンションを出たところで辰巳に呼び止められた二人は、大儀そうに振り返った。

「救急車を呼んでいただいて、ありがとうございます」

辰巳が深々と頭を下げたために、彼の後ろにいた珠子は、足立の呆気に取られた顔を真正面に見た。野村はそっぽを向いて辰巳の姿を視野に入れないようにしている。辰巳は頭を下げたまま、じっと動かなかった。時が止まったようだった。まだ動かない。野村も困惑気味に、頭を下げ続ける辰巳にちらっと目をやり、「ええ、まあ」と歯切れ悪く応じた。それを合図に辰巳はゆっくりと頭を上げた。

二人の後ろ姿を直立不動で見送る辰巳に気づかれないように、珠子は足音を立てずに目加田の部屋に戻った。

帰宅は夜十一時を回った。玄関で靴を脱ごうとしてよろめき、廊下で足元がおぼつかず転びそうになった。夫がリビングのソファで寝入っていた。なぜかノートパソコンを胸に抱きしめている。こっちもひどい状態なので会話しなくてすむのは助かる。息子を風呂に入れて寝かしつけたと一時間前に夫からラインがきていた。息子の部屋に入って寝顔を見つめる。頭がぼんやりしていた。小さな規則正しい寝息に耳を集中させようと試みたが、目を閉じたせいで余計に別のことが頭に浮かぶ。ベッドに入っても寝つけなかった。

翌日、寝不足のまま出勤すると、尾藤が鬼の形相で待ちかまえていた。先ほど渡辺か

ら電話があり、昨日の件をいろいろ聞かれたという。

「ヘルパーが渡辺さんに報告したみたい。で、宇野さんにも直接、昨日のことを聞いた
いんだって。渡辺さんから電話がかかってきても、余計なこと言わないで」

余計なことって何ですか、と聞けるような雰囲気ではない。

「辰巳先生のこと責められて。あげく、私まで悪者にされてさあ」

腕組みをして檻の中の獣のように行ったり来たりしながら、何やらぶつぶつ言っている。

渡辺より先に、ヘルパー管理者の野村から電話があった。昨日、目加田宅で珠子に伝えた内容をそのまま尾藤にも伝えたが、まったく相手にされなかったという。

電話を切ると、真後ろに尾藤が立っていた。

「まったく、言いがかりもたいがいにしてろって」

「辰巳先生の対応に疑問があるみたいで……」

おそろおそろ伝えると、「ヘルパー」ときが偉そうに」と尾藤は吐き捨てた。

「ど素人のたわごとなんて無視していいから。こっちは看護師で、辰巳先生は医者だよ？ 身のほど知らずにも程がある。次、行こう。次！ 目の前の患者さんのことを第一に考えないと」

背中をバンバン叩かれる。しかも指輪が肩甲骨に当たっていた。目加田も痛かっただろうな、と思った。

午後の訪問がキャンセルになり、急ぎよ半日の有給休暇を取ることになった。本当は、溜め込んでいる報告記録を作成しなかったのだが、尾藤から「今日はこどもの日なんだし、たまには息子さんと遊んであげなさい」と諭された。

従業員に年間五日の有給休暇を最低でも取らせないと労基法に引っかかるらしいので、有給は取れるときに取ってほしいというのが本音だろう。午前の訪問を終えて事務所に戻る途中、目加田が住んでいたマンションの前を通りかかった。

マンションの脇のゴミ置き場から、大きな衣装ケースを抱えて出てきた人物を見て、珠子はぎよつとした。渡辺だった。慌てて自転車を停めて駆け寄った。

「その衣装ケース、私が一昨日ここに来て、捨てたんですけど」

処分したのはまずかったのだろうか。振り返った渡辺が顔をしかめた。

「粗大ゴミを勝手に捨てるなって、大家さんに怒られて」

平謝りしながら衣装ケースを引き取ろうとすると、

「うちの事務所に持って帰って処分するから、大丈夫」

渡辺があごでしゃくった先にオンボロの軽トラが一台、道路わきに停まっていた。目加田宅から荷物を運び出しては自分の職場に運んでいるという。

「これで三往復目。大家さんから、クリーニングをしたいから早く撤収しろって言われ

たから仕方なく」

目加田には身寄りが無い。きょうだいはおらず、両親はすでに他界し、親族とは没交渉だと本人から聞いていた。

「身寄りが無い場合、大家さんが処分してくれるんじゃないんですか？」

「それは入居時に敷金や礼金を支払った場合の話」

「というと？」

「目加田さんはゼロゼロ物件にしてもらったんです。大家さんのご厚意で。だから退去時は借主の責任で全て撤収しないといけないんです。で、その借主はもういないから、この物件を紹介した私にお鉢が回ってきたというわけ」

目加田の部屋に引き返す渡辺に、自然とついていく形になった。さすがにこのまま帰りづらい。

「どうして衣装ケースをゴミ置き場に捨てるかなあ。こんなに大きくて目立つのに。大家さんのキレ方、尋常じゃなかったですよ」

「すみません」

「どうせ尾藤さんの指示でしょ？ 尾藤さんにあとはよろしくって言われて、私、怒ったんですよ。相談員は何でも屋じゃないぞって。私を怒らせたらまずいって思ったんでしょうね。それで宇野さんに指示して、形ばかりのお手伝い」

「はあ」

「そもそも、目加田さんが老人ホームを出て一人暮らしをする気になったのは、尾藤さんの強力な後押しがあったからです。それが、こんな亡くなり方をして。そのことを振り返りもせず、検証もせず、しかも後始末は全部こっちに丸投げ」

「はあ」

「亡くなった患者さん宅に勝手に上がり込むなんてできない、診療報酬も取れないし、だってさ。そんなの私だって同じだよ。そのくせ、看護記録のファイルだけはちやっかり回収してさ。亡くなった患者さんの家の上がってるじゃん、ねえ」

「すみません」

その看護記録を取りに来たのも珠子である。

「宇野さん、いま時間あります？ 誰かと一緒だったら、患者さんがいない家にも上がれるでしょうか？ 私一人で遺品を整理するのは、さすがに気が滅入っちゃって」

ここは受けるしかない。尾藤には黙ってしよう。

目加田の部屋はあらかた片付けられ、六畳のワンルームが広く見えた。

「ベッドは業者さんが引き取りに来てくれたんですね」

とりあえず何か話さなければと思って言うと、渡辺は首を横に振った。障害福祉の制度で給付された電動ベッドは買い取り方式のため、介護保険のレンタルとは異なり、処分は自分でしないといけないのだという。

「目加田さんの大学時代の友人に連絡したら、遠方からわざわざ来てくれて、ベッドを解体して車に積んで帰ってくれたんです。ついでにテレビと車いすも。介護事業をやってる知り合いがいるから、そこに寄贈するんですって。ほんと助かりました」

目加田が大学を出ていて、卒業後も連絡を取り合うような友人がいたことを珠子は初めて知った。それを言うと、尾藤さんなら彼のこともっと知ってますよ、と渡辺は答えた。

ベッドが置かれていた場所のすぐ横に、ガムテープを剥がした跡が中途半端に残っていた。車いすから立ち上がる際に足が滑らないよう滑り止めシートを敷いていたのだが、そのシートがずれないようにガムテープでフローリングの床に頑丈に固定していたのだ。

「これが、どうやってもきれいに剥がせなくて」

「どこまできれいに剥がす必要があるんですか？」

「そりゃきれいに剥がせるなら、それに越したことないけど。大家さんから現状復帰の費用を請求されたって誰も払えないし」

珠子は無言で床にかがみこみ、こびりついたガムテープを指先で剥がしにかかった。一年前、目加田が老人ホームを出てこの部屋で一人暮らしを始めて間もない頃、養生テープの方が後で剥がしやすんじゃないか、と彼が言ったのを、たまたま部屋にあったガムテープで間に合わせたのは珠子だった。自分が退出して目加田が一人になったとき、車いすに乗り移ろうとして転倒でもしたら、シートを固定していなかった責任を問われかねないと恐れたのだ。

膝をつけて意地になって床をこすっていると、「そこまでやらなくていいって」と渡辺がそばにしゃがみ込んだ。

「私だって分かってるんですよ。看護師には看護師の役割があって、それ以外の業務はできないってことぐらい。私が言いたいのは、だったらせめて、看護師の職務だけは全うしてくれってこと」

ガムテープの欠片が付着した珠子の指を、じつと見つめながら渡辺は話した。

「こっちでできることは、こっちです。例えば、今の、この片付けとか。当事者が自分ではできなくて、行政も関与できない。でも誰かがやらないといけない。お金にならなくてもいいか、持ち出し覚悟で。そういうことって、この業界、いくらでもあるでしょ？それを尾藤さんは、相談員やヘルパーがやって当然だって思っていて、何もかも押しつけてくる。要するに、タダ働きしろってこと。上司に言われるならともかく、外部の人間にそんな指図される筋合いはない」

話がそれている気がしたが、黙って聞いていた。

「だから尾藤さんとはいつも言い合いになるんですよ」

事務所で尾藤が渡辺相手に、電話で激しいやりとりをしているのは珠子も知っている。見慣れた光景だった。

「でも、今はそんなことを言いたいのではなくて」と、渡辺は話を戻した。

「医者と看護師が、自分たちの職務を全うしたのかったという話ですよ」

自分でもガムテープを爪で剥がしながら、渡辺は語気を強めた。

「野村さんが言っていました。あの先生はヤブ医者ですらない、疫病神だって。私は目加田さんが急変された現場にいたわけではないし、真相は分かりません。野村さんからの報告を受けて、辰巳先生にも確認しましたが、ヘルパーが言うようなことはしていないと言っばかりで、具体的な説明はありませんでした」

「辰巳先生に直接確認されたんですか」

珠子は驚いて相手の顔を見つめた。

「しました。ヘルパーさんから聞くだけでは公平ではないし、状況を正確に把握できないと思っただので」

「それで、辰巳先生はなんて？」

「死因は窒息ではなく誤嚥性肺炎だし、持ち場を離れて尾藤さんに電話したりもしてないし、背中も叩いてないって。お互いの言い分はことごとく食い違っていました」

「先生から電話がかかってきたと、私は尾藤から聞きましたが……」

「そうだ、直也と晚ごはんを食べているときにかかってきた電話で、そう話していた。私も尾藤さんからそう聞きました。だから先生が尾藤さんに電話しなかったというのは事実ではないと思います」

それに尾藤さんが言っていたんですけど、と渡辺は続けた。

「在宅診療の医者なんてたいしたことはできない。看護師に聞かないと何もできない医者ばかりだって。だからって、まずい対応にも目をつぶれているのはおかしいでしょうって言い返したら、あの人、なんて言ったと思います？ 目加田さんは運が悪かったんだって。その言葉が忘れられないですね」

それきり渡辺は口をつぐみ、あとは黙々と二人で書類や衣類を整理した。

クローゼットの奥に、風呂敷包みがあった。取り出して風呂敷の結び目をほどくと額縁が二つ出てきた。おそらく目加田の父母の遺影だと思われる。「これは捨てられん！ どうしよう！」渡辺が叫び、タガが外れたように笑い出した。

銀行口座の入出金を確認すると、出前の支払い額がすごいことになっていた。驚いて夫に確かめると、「在宅ワークをしていると、妙に小腹が空いてき」と言う。コロナ禍で会社の業績が落ち込んだまま復調していないという話は前から聞いていたが、ここ一、二か月、ほぼ毎日在宅ワークになっているのとの関係があるのだろうか。

「まさか、リストラ？」

夫は四十二歳。ありえない話ではない。

「まだそこまではいってないけど」

「けど、何？」

「このままだと、いずれ危ないかもな。俺みたいなヒラ社員は特に。スキルがあるわけじゃないし」

「パソコンを使いこなすのだって立派なスキルでしょ」

「いやいやいや、俺なんて全然たいしたことない。いくらでも代わりがきく」

看護師だって代わりがきくんだよ、と言いそうになったが、何の慰めにもならないので止めた。夫がリストラだなんて。目の前が暗くなる。

「外に出るのが億劫なの？」

出前は自分で買ってくるよりずいぶん割高だし、近所にはコンビニもテイクアウトの飲食店もいくらかでもあるというのに、節約志向の夫らしくもない。

「うーん、一階の集合ポストは、たまに見に行ってるよ」

それは外出とは言わない。パソコン画面を凝視する夫の横顔をうかがう。こんな顔だったつけ、とぼんやり思った。痩せたように見えるが、逆に太ったと言われても、なるほどそうかなと自分はすんなり納得するだろう。

連休明け、珠子は尾藤の運転で葬儀社に向かった。連休により役所が動けないため遅れていた火葬が明日に決まり、目加田にお別れをするなら今日が最後だと渡辺が知らせてきたのだ。向かう車中、尾藤は目加田との思い出を懐かしそうに語るのだが、内容が頭に入ってこなかった。

葬儀社に到着し、火葬を待つだけの簡素な部屋に案内され、棺に横たわる目加田と対面した。尾藤が「眠っているみたい」とつぶやいたとき、珠子はふいに泣きそうになった。

尾藤は持参したタバコと割り箸をカバンから取り出し、慣れた手つきで割り箸の先の部分だけを割り、そこにタバコを一本挟んだ。両上肢に麻痺があり、細かい物を指でつかむことが難しい目加田が自分で喫煙できるよう尾藤が考案したお手製の自助具である。目加田が割り箸の太い部分を握りしめ、タバコを口もとに寄せて吸う要領だ。

供え物の台にタバコの自助具をそっと置いた尾藤は、「一本じゃ足りないだろうから」とタバコを箱ごと供え、「目加田さんはこの銘柄しか吸わないから」と目を赤くして珠子に笑いかけた。こういうところが尾藤らしいな、と珠子は思う。タバコをめぐってヘルパー事業所と戦う姿はとてまかつこよかった。

長時間の介助を毎日必要とする目加田には、複数のヘルパー事業所が関わっていたが、中には嗜好品の介助を断る事業所もいくつあった。タバコを割り箸にセットして本人に渡す介助も、就寝前にウイスキーを瓶のキャップに一杯だけついで飲ませる介助も、事業所の方針でいっさいできないという。

その話を目加田から聞いた珠子が尾藤に報告したとき、彼女は激高した。だったら体

が不自由で自分ではタバコも酒もできない人は、一生、たのしめないではないか。その勢いのまま、尾藤は介助を拒否しているヘルパー事業所に電話をかけた。施設ならともかく、自分の家で好きなことをできないのはおかしいではないか、何のために施設を出て一人暮らしをしたのか、と尾藤がまくし立てるのを、珠子は近くで聞いていた。相手も尾藤のあまりの剣幕に圧倒されたのか、その後、目加田は毎食後の一服と寝酒の習慣を一日も欠くことなく続けることができたのだった。

尾藤は目加田が好んでいた洋菓子店のドーナツと、両親の遺影と位牌も持参していた。渡辺から連絡を受けた尾藤が、昨日のうちに一人で目加田宅を訪れ、両親の遺影を持ち出したのだ。

「ご両親の位牌もあつたんですね」

係員の許可を得て、額縁をはずした遺影と位牌を棺の中に納める尾藤に、珠子は後ろから声をかけた。数日前に渡辺と二人で遺品整理をしたときには気づかなかつた。

「お風呂場で保管していたのよね。なぜか」

振り返った尾藤がいたずらっぽく肩をすくめる。通所サービスで入浴し、自宅の浴室は物置きとして使っていた。トイレトペーパーやオムツなどのストックが山積みになつており、後日、オムツ業者が回収に来ると渡辺が言っていたので、手をつけなかつたのだ。

「一人暮らしを始めてすぐの頃、目加田さんに頼まれて、お菓子の青い缶に位牌を入れて、浴槽の一番下に置いたのよ。そのことを昨日思い出して。すっかり忘れていたから、思い出せて良かった」

二人で棺に手を合わせる。目を閉じると野村の言葉がよみがえつた。

「何もしなくて良かったんです。本人は体調の不安があつて医者を呼んだ。医者はただ本人の話を聞いて、背中をさすつてやれば良かったんです。それだけで患者がどれだけ安心するか。どれだけ痛みが和らぐか」

帰りの車中もそのことを考えていた。医者が背中を叩いた理由は分からない。やはり窒息していたのだろうか。だとすれば医者は処置をしなければならぬが、そもそも辰巳は、窒息ではないと言い、背中を叩いたことも否定している。何が事実なのか、それが分からないとあつては、どうしようもない。

車の助手席から窓の外を眺めていると、「何を考えているの？」と運転席の尾藤が聞いてきた。

「渡辺さんが話していたんですけど」とつさに別のことを口にしていった。

私、怖いんですよ、と渡辺は言った。あのときこうすれば良かったと、ずっと後になつて思うことが。相談員として、今、するべきことが目の前にあるのに、それに気づかず、あるいは気づかないふりをして、完全に手遅れになつてしまうことが。身寄りのな

い人は死んだらおしまい。たとえ医療ミスで命を落としても、声をあげる家族も知人もいないから。でも、本当にそうなのかなって。誰かが代わりに声をあげる手段が何かあるのではないか。自分が知らないだけで。

「渡辺さん、知り合いの弁護士にも相談したそうです」

「それで？」

「やっぱり身寄りが無いうえに証拠もないから、訴えるのは難しいって言われたらしいです」

「じゃあ、渡辺さんも納得したのね」

「いえ、納得はしていません」

予想外に大きな声が出た。ハンドルを握っていた尾藤も、目を見開いて珠子を振り返り、またすぐ前を向いた。

「それに、私も……納得できていません」

声が震えていた。情けないけれど仕方なかった。

「何のこと？」

「目加田さんが急変したとき、尾藤さんから私に連絡が来ました。そのとき辰巳先生から電話がかかってきたと……」

「それが何？」

「辰巳先生は訪看に電話はしていないって、渡辺さんに言ったらしいんですけど」

「先生が言うなら、そうなんでしょうよ」

「でも」

尾藤の横顔をうかがうが、そこに何の感情も読み取れず、不安になる。

「先生が訪看に電話したかどうかって、それが何だって言うの？ そんなに重要なこと？」

いえ、と珠子は言い淀んだが、話すチャンスは今しかないと思い直した。

「先生が尾藤さんに電話したのは事実なのに、なぜ電話はしていないって先生がおっしゃるのか、それが不思議で」

ヘルパーからの報告の詳細については、尾藤も把握しているはずだ。

「宇野さん、私たちにとって関わりが深いのは医者でしょ。外部の関係者が何を言ってきたも、医者との関係を第一に考えないと」

そう言ったあと、尾藤はハンドルを握り直した。

「目加田さんが亡くなって、私だって悲しいよ。少なくとも、あなた以上にはね。長い付き合いだったわけだし。でも、もう帰ってこないんだから」

「……」

「切り替えが大事。私たちのような仕事は、特にね。前に進まなければ」

これ以上、会話を続ける勇氣はなかった。ごめん、と心の中でつぶやく。今の自分に

はこれが限界だ。ごめん。誰に対して謝っているのか分からないまま、無言で助手席の窓を細く開ける。初夏とも思えない熱風が入り込んできた。

自宅に電話を入れ、急な訪問が一件入ったので帰りが少し遅くなると息子に伝えた。「晩ごはんはお父さんが作るって」

「へえ」

後ろで、任せるー、と夫のご機嫌な声がある。大丈夫なのかホントに、と思わず漏れ出たつぶやきまで、息子は律儀に伝えている。年齢のわりに大人びて聞き分けの良すぎる子だ。少し心配なほどに。大丈夫、大丈夫！ という返事と二人の笑い声。晩ごはんのことじゃない、お前の心配だよ！ と言ってやりたかった。何というお気楽さだろう。

相変わらずガタつく玄関の開閉に手間取り、事務所に隣接する駐輪場に向かう。路地の向こうに沈もうとしている夕日が目に飛び込んできた。大丈夫、大丈夫。夫の声の頭の中でリフレインする。

今の職場で看護師としてのキャリアを積もう。通常の倍以上の大きさに思える夕日に見惚れながら珠子は誓った。最初からそのつもりで病院を辞めて、尾藤についてきたのではなかったか。今までと同様、これからも懸命に働く。それだけのことだ。何も変わりはない。電動自転車のペダルを踏み込み、ぐんっと一気に加速した。

国道に出ると向かいに辰巳クリニックが見える。午後の診療を待つ人々が外にたたずんでいた。タバコを吸っている男女も数人いる。辰巳は喫煙者に寛大な医者だ。目加田もそこを評価していた。

タバコの煙で輪を作る特技を、目加田に一度だけ見せてもらったことがある。タバコの煙を口に含み、唇をすぼめて煙の輪を吐き出す。珠子が目を見張ると、目加田は続げざまに口から煙の輪を吐き出してみせた。驚いたことに、輪の大きさを調整することができた。まず大きい輪を作り、次にそれより一回り小さい輪を作って、大きな輪の中に収める。それをもう一度繰り返すと、三重の輪が空中に漂った。「おおー」と珠子が感嘆の声をあげると、「これぐらい、普通だろ」と目加田は照れた。

「こんなの初めて見ました。私はタバコを吸わないし、周りも吸う人はほとんどいないし。こんなふうに自由自在にタバコの煙で輪っかを作れるなんて、すごい。コツとかあるんですか」

興奮して早口になる珠子に、目加田は嬉々として教えてくれた。

「唇をッお”を発音する形にするんだよ。この唇の形なら俺でも難なくできるからね」それを聞いたとたん、すつと血の気が引いた。もし言語に障害のない人が同じことをしたら、自分はこれほど感動しただろうか。煙で輪を作ることよりも、少しばかり言葉をしやべりにくい目加田が口唇を自在にコントロールできることに驚き、過剰反応してしまったのではないか。急速にトーンダウンした珠子に、どうした、具合でも悪くなっ

たか、と目加田は心配そうに声をかけてくれたのだった。

もうすっかり忘れていた出来事が、昨日のことのように鮮やかに思い出されて、珠子はうろたえた。あのとき、どう考えるのが正解だったのか。こんなことになるなら、一緒に楽しんで盛り上がれば良かった。

国道を自転車で走り抜ける。ふいにタバコの煙の輪が数珠つなぎになって目の前に現れた。ゆるく弧を描いて空中を漂う。上から順に輪がほどけて、夕暮れの空に溶けるように消えていく。それでも下の方から新しい輪が次から次へと生まれ、途切れることはない。手を伸ばせば届きそうな距離を保ちながら、自転車を先導するように、いつまでもそこにある。追い抜こうとして珠子はさらに加速した。